

【学会報告】

第9回 Asia Conference on Kinesiology 2018 に参加して

加藤 尊^{*1}



第9回 Asia Conference on Kinesiology 2018 が、11月2日から5日まで National Taiwan University of Sport in Taichung, 台湾にて開催された。今回は、「Middle-aged postmenopausal women have different response on BMC between proximal femur and distal radius」とのタイトルにてポスター発表を行って来たので、その報告をする。

大会は、台湾の第3の都市にある、国立台湾体育運動大学 台中にて開催された。台湾でのこの大学の相対的な位置づけが良く分かっていないのであるが、前の学長が前台湾スポーツ大臣であること、また、台湾第三の都市にあたる台中にある国立大学のスポーツ専門大学であることから、そのレベルは高いのではないだろうか。施設などは立派な物であったように思う。今回は、大学にほど近い、また、台中駅からも近い場所にホテルを取って歩いて通った。駅から12~3分でホテル、また、ホテルから台中公園までが8~9分、台中公園から大学までが7~8分であったろうか。ゆっくりと歩いても20分前後で到着するような距離ではあった。ただ、11月とはいえ気温31度、湿度も程ほどにあったため、毎回歩くたびに汗まみれとなった。半袖の準備をしていた訳ではないため、その準備の悪さを少々恨んだりもした。

学会の規模はさほど大きくはないと思う。ポスター会場はロビーということであったが、少し広めの玄関先スペースと言った物であった。運悪く、このロビーの最左奥部分が私のポスタースペースとなった。さらに追い打ちを掛けるよう、右隣りがキャンセルした演題でなかなか人が見に来にくいスペースとなってしまった。それほど多くの質問者がいた訳ではなかったが、上海体育大学の Zuo Qun 先生（女性）が、閉経後の中高年女性に対する研究でもあるため、大変興味を持ってもらっていたようで、名刺は持ち合わせていないが、E-mail アドレスの交換と、ポスターの写真を取らせて欲しいということで、快諾した。ご本人は、ラットやマウスを使ったスイミング実験をやっており、動物用の DXA で運動の骨に対する効果を測定しているそうであり、今回我々の研究は臨床での実験であるため、大変に興味ある部分であったようである。かなり長い間お話をさせて頂いた。

斜め向かいには韓国の研究者、隣は台湾の研究者で共に英語でポスターが書いてあったので質問をしたが、あまり英語が得意ではなかったのか、また、私の発音も悪かったのかも、こちらが言っていることが正確に伝わらず残念であった。展示されている全てのポスターが英語で書かれている訳ではなかった。漢

受付日 2019.2.22

*1 朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科

字で書かれたものもあり、漢字であれば少しは察しが付くであろうと、ほのかなる甘い考えを持っていたのであるが、全くもって太刀打ちが出来なかった。これは、街の中でも一緒であり、まあ、分かる物もある、程度の話であった。

スポーツバイオメカニクスを専門とする中京大学の大学院生より、ゴルフについての研究を紹介してもらった。現在はゴルフインストラクターをしているとのことである。アプローチに関する研究であった。隣の台湾の研究者はレジスタンストレーニングに関する研究を発表しており、見まわしてみてもかなり幅広い内容の研究が発表されていた。

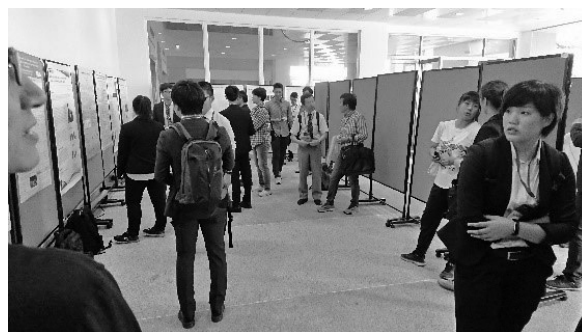
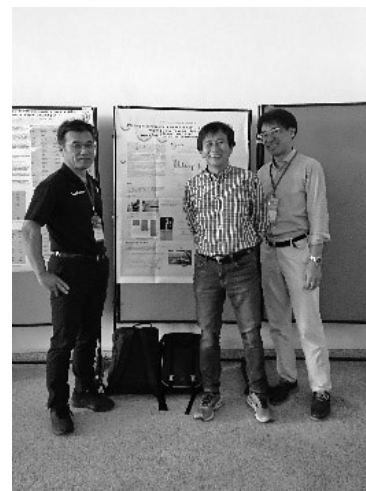
この大学の学部学生の一人が、私のポスターの前に来ていたので声を掛け、研究の紹介を行った。英語は斜め前と横の二人の発表者よりも聞き取りも、しゃべる方も遥かに達者で、自信があったから来たのかどうか分からないが、3年生だそう。内容も、理解が出来ない所を的確に質問し、彼自身は非常に合点がいった様子で大変に満足気であった。東京と福岡には来たことがあり、機会があればまた来日したいとのことであった。親日的なイメージのある台湾であるが、確かにその雰囲気はいろいろな場面であり、駅で乗る電車に往生している時、切符を自動販売機で購入する際などに不意に助けてくれたりした。また滞在していたホテルでも、フロントで日本語のやり取りをしている場面を幾度も見かけた。

学会に来ると思う事であるが、いろいろな状況で頑張っている研究者が数多くいるということである。私にとって今後の刺激、励みとなり、新たなモチベーションも得ることが出来、大変に実りの多い出張となった。台湾は、実は初めてではなく40年以上前に1度来ている。ただ、あまりに私が小さかったため記憶が断片しかない。当然街の感じも良く思い出せず、記憶にはないが、街の食堂は随分と近代化したように思えた。シャープを買収したホンファイが台湾の会社であることを見ても分かるように、この40年間での台湾の足取りは確かなものであるように感じた。

大学名や学科名などには体育という漢字の古い書体を使っている。日本では、近年大学の学科名から体育という名称が消えて、本学のような新設を含めスポーツ科学という名称が多くなっていることについてどう思うか、話を聞いておけば良かったと感じた。例えば、日本体育大学も漢字表記による大学名は同じであるが、英語表記は、Nippon College of Physical Educationが、Nippon Sport Science University となっている。ちなみに国立台湾体育運動大学は、英語表記であれば National Taiwan University of Sport となる。

良く、日本は成熟した社会という話を聞かすが、一方でシンガポール、マレーシアでも感じた若さというか、躍動感がこの台湾の地にもあるよう思う。鉄道を新たに造り空港との間を結びアジアのハブ空港化を目指す

一方で、鉄道の周りに新しい街を造っていく。まさに、かつて日本でも進めてきたような政策を今、着々と進めているように感じる。ちなみに、この学会が開催された3週間ほど前に起きた電車の脱線事故、死者も出る大惨事であったが、あれは台湾の東側のかなり曲線の厳しい路線であり、台湾鉄道である。台北と台中は新幹線で結ばれており、こちらの方は台湾高鉄で線路自体のカーブのRは遥かに大きく緩いのではないかと思った。時速は300km時程度で走



行していた。全くの日本から輸入された新幹線であり、非常に見慣れたものであり、快適であった。

短い滞在ではあったが、日本で一度お会いしたことのある黄先生と連絡が取れ(渡台の2日前に連絡し、急遽、お時間頂いた)、大変に急で申し訳なかったのであるが、ご家族も含めご一緒にお食事をする機会を得た。台湾でも少子高齢化の減少は大変急激に進んでおり、大学教員の立場として考えると、ある意味日本よりも深刻な状況にあるとのことであった。現在は台湾の私立大学である銘伝大学にお勤めである。元々女子大であったとのことであるが、現在は男女共学の総合大学である。台北と桃園の2か所にキャンパスを構えており、台北のキャンパスはかつて世界の10大ホテルの一つと謳われた圓山大飯店の正に裏手に位置している。このことから分かるように、当時の政権と密接な関係を持っていたというような説明をして頂いた。

時間の関係上、台湾の事実上の代表チームである新体操部の新しい演技を見ることは出来なかった(場所が分からずに途中で断念した。その日の夕方に中京大学の桜井伸二先生より写真が送られてきた)のが、少々心残りである。このような場所に来ないと出会えない人、研究者はいるのであるな、と7月に続き実感をした次第である。また、何とか現在行っている研究拡大の可能性を模索し、形にしていきたいとつくづく実感した今回の学会であった。

